

『紫式部日記』の憂愁の叙述について

——女房日記の生成——

福 家 俊 幸

『紫式部日記』（以下、『日記』と略す）は対立する二つの方向の叙述を持っている。すなわち、公的な性格を宿した記録的叙述、主家の盛儀を克明詳細に記す叙述と、その一方で私に内向する自照的叙述、自己の憂いを連綿と綴る叙述の混在である。文学作品はつねにアンビバレンツ（両義的）なものをかかえもつてであろうが、『日記』のそれは一見内部矛盾にもおぼしき分裂を生じているかに見える。しかし、実際に『日記』を読む時、この二方向の叙述が不思議な調和の中で連関していることに気付かされることも事実である。このことが『日記』の主題や性格を考える上で一つの問題点となっていたように思われる。

『日記』を研究する上で、記録的叙述と憂愁の告白の同居をいかに位置づけるか、は根幹に関わる重要事であろう。『日記』の作品理解にも密接に関わる問題と思われる。以前、この問題について私見を述べたことがあるが、論全体がいささか一面的に傾いた感を抱いている。また、その後⁽¹⁾に公にした論との関連においても、この問題を再度論じる必要性を感じている。従って、本稿は

前稿を全面的に書き改め、新たな視点を加え、そこで結論とした新しい創意あふる女房日記生成の機制をより明確に論証したく思う（引用本文は完訳日本の古典に拠った）。なお、消息的部分についても論者は主家慶祝の記を補完するものと考えているが、本稿では直接触れ得ないので、別稿を参照されたい。⁽²⁾

一

『日記』をいかなる作品として位置づけるかについては、多分に『日記』の読みから還元さるべき問題ではあり、論者によって、その位置づけは千差万別である。また、その課題は『日記』がいかなる目的で書かれたのかという問題と表裏の関係にある。

その問題を考えるにあたって、『日記』が同時代の女流日記文学の中でも、稀にみる記録性を持っていることはまず確認されてよいことであろう。記録からの事実上の訣別が日記を文学たらしめたとも言われる日記文学の系譜の中で、行事記録に貪婪な関心が窺える『日記』の存在は特異なものとも言える。それも、この

『日記』は行事の精確な描写を志向しており、そこにかけられた言葉の絶対量の多さを軽視するわけにはいかないと思うのである。

記録することへの志向という点では『日記』はいわゆる女房日記や歌合日記に近似する性格を持っている。女房日記については、一言触れておかねばならないだろう。女房日記はよく登場するジャンル規定の用語であるにかかわらず、その実態はとりわけ平安時代の実態は明確ではない。というのも、今日女房日記の祖とされる『太后御記』は、現在『河海抄』に引用される断片六カ所しか伝わっていないのである。『太后御記』については、石原昭平氏の早くの研究がある。『河海抄』にある六箇所の断片はいずれも祝事、賀事の行事記録に限定され、いずれも稗子（太后）の側に立って記されている。筆者は、石原氏も説かれている如く、稗子自身ではなく、稗子に仕える女房であろう。女房日記を主家に奉仕する女房が主家の関わる行事、慶事を筆録するものと定義するならば、まさしくこの作品はその旨に合致するであろう。『日記』もまた主家の皇子誕生という慶事を紫式部という女房が記しているわけだから、それだけを見れば『日記』は女房日記の流れにあるものと言ってよいかもしれない。例えば、『太后御記』のような記述、

おととくまでかて給ぬ又をくり物沈のはこ一よろひいれたり
せんたいの御てのまむようしう今一には本五まきやまとこと
一云々（承平四年十二月九日御賀『河海抄』所引）

と、次の『日記』の記述にはほぼ同じ記録者としての態度が看取されるであろう。

よべの御おくりもの、けさぞこまかに御覧する。御櫛の宮の
うちの具ども、いひつくし見やらむかたもなし。手宮一よろ
ひ、かたつかたには、白き色紙つくりたる御冊子ども、古今、
後撰集、拾遺抄、その部どもは五帖につくりつつ、侍従の中
納言、延幹と、おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書か
せたまへり。（P183）

両者の著作態度は同一と言っても過言ではなからう。しかし、そのことをもって『日記』をただちに女房日記の系譜に組み込むわけにはいかないことは後述するところである。

次に歌合日記について触れておくが、このジャンルは女房日記と近似する性格を持っており、女房日記の形態の一つとも考えられる。歌合日記は現存する作品がいくつもあるので、その性格は明確である。主家主催の歌合に参画した女房が女房の視点から歌合の様子を仔細に記録したもの、といった性格を見て取ることができる。すでに、中野幸一氏によって歌合日記と『日記』の共通の表現が指摘されているように、『日記』中の「くはしくは見はべらず」「そなたのことは見ず」「奥にゐて、くはしくは見はべらず」「まほにも見えす」といった盛儀のすべてを記し得なかったことの断り書きと目される叙述と、歌合日記の「装束赤色に桜襲なるべし。されど見えねばかひなし」（天徳内裏歌合）「楳人舟人往きちがひたる、同じさまなればくはしうは書かず」（斎宮員合日記）といった叙述はほぼ同じ著作態度の産物と判断してよいだろう。従って、『日記』には女房日記、歌合日記に共通する記録することへの志向が認められると言い切つてよいと思われる。

なお、この『日記』を庭訓的な作品と見做し、直接の読者に賢子を当てる説について触れておきたい。萩谷朴氏は『日記』の記録性を認めながらも、そうした記録性は自分の子孫のために行事次第・有職を伝える男性漢文日記に通じるものと考えておられる。しかし、当時の女性がいわゆる家の記ともいふべき、男性の漢文日記的な作品を記している例が他に見当たらないことは、この説の気掛かりな点であろう。無論、『源氏物語』の作者でもあったからには相応の自我の成熟があり、家をもって立つ自覚は『日記』から見て取れるが、ただちにそのことが男性官人的な日記に結実したとは考えにくいのである。このような詳細な皇子誕生の記録は、主家の庇護や協力なしには成り立ちえなかったのではあるまいか。御産の上を下への喧騒の中、あるいは威厳に満ちた産養の盛儀の中、作者の職掌、役割については『日記』に触れられるところはないが、記録者としての役割が主家から与えられていたと見るのが自然であろう（従って、里下りをしている友人に、御産の状況を知らせる書とする説にも従えない）。萩谷氏は作者の夫宣孝の家系は代々日記をつけた人が多いところから、その結果たいした抵抗もなく、家記製作に着手し得たと言われるが、男性官人と女房を同列で扱えるか、疑問は残るように思われる。以上、文学史的な視野に立てば、この『日記』は女房日記や歌合日記と共通性が見出され、従って、この『日記』も主家の要請によって女房の視点から主家の盛儀を記録した作品とする見方をまずは強めることになるであろう。

この『日記』が主家の重大事たる皇子誕生と慶祝の盛儀を克明

詳細に記しとどめて、その繁栄を顕彰していることは否定しがたい。『日記』冒頭からして、御産を控えた影子中宮の姿が点描され、以下道長、頼通、倫子と主家の代表的な女房達が紹介されていく。しかし、『日記』には最初に触れた如く、宮仕えを厭うが如き、憂悶の赤裸々な告白がなされ、慶祝の記として全体を把握することを困難ならしめているのである。従って、慶祝の記を書き次ぐ営みが、必然的に作者をして外界と鋭く対峙させることとなり、そこに全面的に傾倒し得ない自己の内なる世界が見つめられ、ために作者の内なる憂愁が掘り起こされ表現として定位された、とする見解が広く認められ、浸透しているのも理由のあるところであろう。しかし、次のような疑問も残る。『日記』の著作目的にも密接に関わるのであるが、なぜ作者は自己の憂愁をあえて主家顕彰の記の中に表現したのか、という素朴といえは素朴な疑問である。つまり、外在する世界を取り込み、内在化していく過程に、自己の憂いが掘り起こされることは十分認められることであるが、それが実際に表現として定着されるのはまた別の次元の問題となってくる。表現として定着されるには、定着しても許される作品内論理との照応が認められしめるべきであろう。別の言い方をすれば、自立する作品世界の中で、憂愁の情の叙述（以下、便宜的に憂愁の叙述とする）が記録的叙述にせりあうように存在しなければならぬ必然性は自己の内的必然にとどまらず、その世界のおのずからなる要請に拠るもの、と捉えられてしかるべきはずだ。従って、主家讃仰の思いも、憂愁の告白もどちらも作者の内面的真実の発露であるにしても、そのことをもって両者の

混在を説明することはできないわけだし、書き次ぐ営みが作者をして、より新しい表現世界に導くことは十分想定しうることなのだが、そうしたことが表現に定着されるには作品の描いている世界の許容するところではなくてはならないと思われる。作者は憂愁の叙述が主家顯彰の記と真向から対立するものと考へてはいなかったであらうし、むしろそこに一種の表現効果を期したように思うのである（なお、このような立場からの立論に山本利達⁽⁸⁾・佐藤和喜氏⁽⁹⁾の論考がある）。憂愁の叙述もしかるべき機能を作品世界に荷っているのであり、その内省の深さを個別的に卓立して云々するのではなく、全体の表現との関連から総合的に検証されなければならないであらう。次節では主家顯彰の記の中に憂愁の叙述が記された必然性について考へていきたい。

二

憂愁の叙述を考えるにあたって、この叙述が作者の自らの身分に対する自覚の表明に他ならぬこと、女房としての謙退になっていることをまず確認したい。行幸直前の長大な憂愁の叙述は作者の心の在り方が顕在化していて、華やかな宮仕えに馴染まない魂の孤独を表白しているように見える。まず、この叙述から検証していくが、その記述の直前に初孫の御しとに濡れて喜ぶ道長の像が定位されていたことに着目しておきたい。

ある時は、わりなきわざしかけたてまつりたまへるを、御紐ひきときて、御几帳のうしろにてあぶらせたまふ。「あはれ、この宮の御しとに濡るるは、うれしきわざかな。この濡れた

る、あぶるこそ、思ふやうなる心地すれ」と、よろこばせたまふ。
(P163)

「思ふやうなる心地すれ」と喜ぶ道長の姿は初孫の誕生を喜ぶ好々爺としてのそれであることはもとより、権力基盤を固めつつある権力者としての姿の象徴であることも押さえておかななくてはならない。それに続く形で、

中務の宮わたりの御ことを、御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼして、かたらはせたまふも、まことに心のうち
は、思ひゐたることおほかり。
(P163)

道長から具平親王の「心よせある人」と見做され縁談の仲介を求められたことが記されるが、ここで作者は「思ひゐたることおほかり」と、苦惱に沈む心情を吐露している。「思ふやうなる心地すれ」と豪語し喜ぶ道長の姿と、道長の申出に苦悩する作者の姿は、まさしく対比的といえよう。このような対比構造は実は地続きの長大な憂愁の叙述にもたちあらわれている。

行幸近くなりぬとて、殿のうちを、いよいよつくりみがかせたまふ。よにおもしろき菊の根を、たづねつつ掘りてまゐる。色々うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老も退ぞきぬべき心地するに、なぞや、まして、思ふことの少しもなのめなる身ならましかば、すきずきしくももてなしわからぎて、常なき世をもすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを、見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の、ひくかたのみつよくて、もの憂く、思はずに、歎かしきことの

まさるぞ、いと苦しき。いかで、いまはなほ、もの忘れしなむ、思ひがひもなし、罪も深かなりなど、明けたてば、うちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世をすぐし
つつ

かれも、さこそ、心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦し
かんなりと、思ひよそへらる。(P164)

行幸を前に飾りたてられた土御門第(道長の邸宅)の様子を見るにつけ、作者の思念は憂愁の領略するところとなる。見事な菊を目の当たりにして、老いも薄れる思いがする、とまず作者は述べるが、以下反実仮想的に、自分が物思いの少ない身ならば、風流好みに若々しくふるまい無常の世を過ごすだろうに、と述べ、物思いの絶えない自分を暗に示し、更に、結構なこと面白いことを見聞につけ、「思ひかけたりし心」のひきつける力が強くて憂悶に沈む、と息の長い文章を結んでいる。そして、一見物思いもなさそうな池の水鳥を、同じようにその身は苦しいと我が身となぞらえている。確かに、この尋常ではない憂いの告白は反宮仕え的な趣さえ持ち、主家慶祝の記にはそぐわない印象は否めないかもしれない。しかし、こうした叙述が他ならぬ主家の素晴らしい結構を媒介にして登場していることは見落としてはならない。帝の来訪という輝かしい時間を目前にし、一層磨きたてられた土御門第を目の前にして、作者は苦悩に沈んでいるのであり、先に見た思いをかなえた道長の姿と、苦悩に沈む作者の姿との対比構造がここにも現れているのである。

作者は「思ひかけたりし心」の領略するところとなって、孤愁に沈む、と語っている。「思ひかけたりし心」とは何か。出家遁世の願ひとは文脈からいって考えにくい。そして、その内実を探ることも大切だが、ここで「思ひかけたりし心」と述べて、それ以上深く苦悩の本質ににじりよううとしない書きようにも注意をはらってしかるべきと思う。実は、道長に縁談の口利きを求められた時も「思ひゐたることおほかり」というように、そうした複雑な思いが何故発生したのか、その機微には一切口をつぐんでいたのだった。このことは苦悩を語るところに主題があるのではなく、前述の対比構造を示すためにこそ、かかる憂いの叙述は置かれていたことを如実に示しているように思われる。つまり、宿願を果たした道長の姿や栄華の時を確実にその空間に刻みつつある土御門第の素晴らしい結構を一方で強調しつつ、その場において苦悩に沈まざるを得ない自画像を対比的に定位する点に作者の主意を見出すべきと思われるのである。栄華の世界にあって、そこに無条件に浴しうる人間と、その世界とは別次元の内的苦悩の中で、行幸直前の憂愁の叙述に示された如く、水鳥のように不安定に生きる人間が象徴的に描き分けられているように思われる。

実は、こうした対比構造は道長が『日記』に登場する最初の場面の作者の詠歌からたちあらわれている。早朝、道長が作者の局を訪れ、歌を所望する。作者の詠んだ歌は次のようなものであった。

をみなへしきかりの色を見るからに露のわきける身こそ知ら
るれ (P143)

今を盛りの「をみなへし」は道長が譬えられているのであり、一方で我身は露にわけへだてられ、盛りの過ぎたものと歌われている。もとより作者は自己卑下することによって、道長を称賛しようとしたのである。作者は歌の前の地の文においても、道長の「いと恥づかしげなる」姿に「わが朝がほの思ひしらるれば」という反応を示していた。いわば謙退することによって、対象を際立たせているわけだが、和歌の技法を超えて作者をしてこのような謙退する表現をとらせたのは、彼女の社会的身分に拘束されるところが少なかつたはずである。

御興むかへたてまつる船案、いとおもしろし。寄するを見れば、駕興丁の、さる身のほどながら、階よりのほりて、いと苦しげにうつふしふせる、なにのことごととなる、高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかしと見る。

(P166)

この記述は行幸の当日、一条帝が土御門第に到着した際に、興をかついでいる駕興丁の姿を注視している場面である。苦しうにうつふしている駕興丁の姿に、作者は高貴な人々の間の宮仕えで「身のほど」の「かぎり」を痛感している我が身の姿を重ねているのである。ここでの「身のほど」が彼女の社会的な身分——すなわち女房としての身分を指し示すのであり、その限界性がここで慨嘆されているのであらう。作者は行幸直前の憂愁の叙述においても、栄華の世界を謳歌できない自分を対比的に記していたが、そこには女房としての身の程意識が介在していたと見るのが自然だろう。

伊藤博氏は『日記』における憂き身の痛覚の叙述は「この極盛の栄花の世界にみずからが能動的にかかわりえない無念さと地つづきのものであった」と推測されるが、確かにこのような自らの身分に関する叙述と先に見た行幸直前の憂愁の叙述を結ぶことによって、栄華の世界から疎外されている嘆きをその基底に看取することは可能であらう。しかし、先に確認した如く、行幸直前の憂愁の叙述が作者の憂愁を描くことのみに目的があるのではなく、輝かしい土御門第との対比にこそ主眼があるとすれば、別の位置づけがなされるであらう。輝かしい栄華の世界とそこに関われない身の程(女房)である内的苦悩を暗に対比することで、自己を謙退し、反対に主家を高めている、と見做すべきではないかと思われる。先に見た「をみなへし」歌の道長賛美の論理が、ここに拡大深化した形であらわれているように思われる。

そして、このような女房としての自己認識の表明は、称賛する対象を際立たせるのみならず、すぐれた女房の証でもあった。こうした考え方を裏付けるものとして、彰子中宮に仕える三人の代表的上臈女房達の描かれ方に注目したい。先ず重視したいのは、行幸直前の憂愁の叙述を受ける形で、少少將の君との贈答歌が置かれていることである。すでに別稿で指摘したところであるが、この贈答が長大な憂愁の告白に地つづきで繋がることで、少少將の君も作者と同じく、苦悩をもって生きる人物として位置づけられることとなる(事実、中宮内裏遷啓の記述で、少少將の君を「世を憂しと思ひしみてゐたまへる」と述べている)。また、行幸直前のそれと並んで長大な憂愁の告白がなされる里居の記(後述する)も、大

納言の君という上臈との贈答歌が地つづきに連結している。これも上記稿で指摘した如く、大納言の君も作者の憂悶をわかちあう人物として、その内面世界に繋がる人物として位置づけられる。小少將の君、大納言の君といった、影子後宮を代表する上臈女房達が『日記』内で、作者の憂悶の良き理解者にして、同様の苦悩の中に生きたかの如き印象を与える書き方になっていることは、憂愁の叙述の位相をも照らし出す事象のように思われる。小少將の君も大納言の君も、その贈答を憂愁の叙述の後部に置かれることで、榮華の世界にあって、内的苦悩に沈んでいる作者の延長に位置づけられるわけである。

次に同じく上臈女房である宰相の君の造型を確認したい。

「もの狂ほしの御さまや。寝たる人を心なくおどろかすものか」とて、すこし起きあがりたまへる顔の、うち赤みたまへるなど、こまかにをかしうこそはべりしか。(P145)

主上外に出でさせたまひてぞ、宰相の君はこなたに帰て、
「いと顯証に、はしたなき心地しつる」と、げに面うちあかみてゐたまへる顔、こまかにをかしげなり。(P169)

まず、より特徴の明確な後者の記述から見ていきたい。行幸の盛儀の中、宰相の君は列席者の注視するところとなって、「面うちあかみてゐたまへる」とあるように恥じらっているのである。輝かしい盛儀の中、つましく恥じらっている姿が描かれているのである。前者の記述は、昼寝をしていた宰相の君を起こした場面、作者はその姿を物語の姫君にも譬えて絶賛している。「うち赤みたまへる」顔に美を見出しているわけだが、宰相の君は恐らくこ

こでも作者の言葉に、あるいは視線に恥じらって赤くなっているであろう。

つましく恥じらう宰相の君の造型は、一見作者や小少將の君、大納言の君の姿とは違い印象を受ける。しかし、違いは違いとして、宰相の君の恥じらいは榮華の世界にあって、つましみを忘れない女房像を結んでいるという点で、実は行幸直前の憂愁の叙述の在り方と通底する面があるように思われる。先に確かめたように、作者は行幸直前の憂愁の叙述の中で、榮華を全面的に享受できる人間（道長を始めとする主家の人々）と、そこに浴しきれない人間（自己）があることを対比的に描いていた。そして、榮華の世界から距離を置く姿勢は、自らがそこに仕える女房に過ぎないという自己認識にかかると思われる。一介の女房にしか過ぎない、という思いが、あの土御門第の素晴らしい結構を称賛しつつも、全面的に埋没するのをおしとどめるのである。しかし、こうした自己認識は榮華の世界の主役たりえない無念さのあらわれではない。または、憂愁の叙述がこれまで描いてきた榮華の世界をいかに相対化するものではない。他ならぬ小少將の君や大納言の君といった影子中宮の代表的上臈女房達との共通性が『日記』内で位置づけられていることは、むしろ美点をもつものとして捉えられてしかるべきなのである。女房に過ぎないという認識——それは見方を代えれば、つねに身の程をわきまえているという点で、すぐれた見識を示すこととなる。厳格な身分制度に支配された時代に、自らの分を守り謙退することは、一つの美德となりえたのであった。⁽¹³⁾ 榮華の世界にあって、身の程をわきまえ、個人の内

的苦悩を忘れないことは、主家に対してつねに謙退しつつ節度をわきまえて仕えていくことであり、このような見識ある女房の存在は抱えている主家を高めることにもなる。宰相の君が恥じらった姿で描かれるのも、一見位相は異なるようだが、栄華の場にあつて、つねに女房としての節度、慎みを忘れていないことを示している点で、栄華の場で身の程をかみしめている憂愁の叙述で示された自画像と近接する。そこに美点が見出されているのである。実は、『日記』における彰子中宮の描き方も宰相の君の造型と一脈通じるところがある。

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語をするを、聞こしめしつつ、なやましくおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの…… (P141)

御帳のうちののぞきまゐらせれば、かく国の親ともてさわがれたまひ、うるはしき御けしきにも見えさせたまはず、すこしうちなやみ、おもやせて、おほとのごもれる御有様、つねよりもあえかに、若くうつくしげなり。 (P161)

この二つの記述は彰子中宮の描写である。まず、前者は『日記』冒頭部で、出産を控えた彰子の姿がクローズアップされた場面である。ここで彰子はつわりの苦しみをさりげなくもて隠すという自己を抑制する姿で描かれる。後者は七日の産養の記述である。ここでの彰子の姿は皇子の母として威風堂々とした造型ではなく、弱々しくも愛らしい、一人の若い女性として描かれている。作者は、意図的にこのようなあえかな姿を描いたとおぼしい。

彰子中宮は事実上、道長家の栄耀を切り開いた女性でありなが

ら、ここでの描き方はむしろそういうイメージから遠いあえかな、つましやかな印象を受ける。事実、この『日記』に登場する彰子は、例えば『枕草子』に登場した定子中宮のように、場の表面に立つことなく、さりげなく描かれるのである。そして、作者はそうした彰子中宮の在り方に美を見出し称賛しているのである。こうした描き方をする要因を彰子中宮の個人的性格に還元することは片手落ちであろう。ここでは、つましくたおやかであることが美点とされた当時の女性観に寄り掛かるところが多く、栄華の中枢にあつても奥床しさを忘れないという点に、賛美の構図が見て取れるのである。つまり、中宮に仕える女房達の造型に近似するのである。一体に、道長の権力基盤は伊周追放の辺りで固まりはじめるわけだが、それを盤石にしたのが、他ならぬ敦成親王の生誕であつた。絶対に近い繁栄が道長家には保証されたのである。洞察力に鋭い作者のこと、この栄華の卓越性は痛感していたに相違ない。そして、それゆえに尚更、作者は彰子中宮を喜びの絶頂にある姿では描かなかったのだろう。栄華の中枢にありつつ、そこに溺れることのないつましやかな中宮の造型こそが、中宮を称賛することになるのであつた。

真の輝かしい栄華の中であくまでも奥床しい中宮に、おのれが身の程をわきまえ、距離を置き、時に憂いに沈みながら仕えていく女房達——ここに君臣相和す姿が描かれている。道長との間に構築されていた対比構造は、ここにはない。作者が意図的に描きわけているのだろう。このような称賛の方法の違いには中宮を奥床しく、道長を権勢者として描こうとする作者の意図があるので

ある。いずれにしても、憂愁の叙述は見識ある女房ゆえの謙退を示すことになるのであり、主家慶祝の記をむしろ際立たせる機能を荷なっているように思われる。

三

中宮内裏還路直前に置かれた里居の長大な憂愁の叙述についても考えておかねばならない。ここで作者は宮仕え以前と以後の境遇の変化を慨嘆しているわけだが、この嘆きが実は次のような叙述から始まっていたのである。

御前の池に、水鳥どもの日々におほくなりゆくを見つつ、入らせたまはぬさきに雪降らなむ、この御前の有様、いかにをかしからむと思ふに、あからさまにまかでたるほど、二日ばかりありてしも雪は降るものか。見どころもなき古里の木立を見るにも、ものむつかしう思ひみだれて……（P178～9）

作者は雪の降った土御門第の様子を心待ちにしていたが、折り悪しく里に下った時に雪は降ったのだった。「降るものか」という表現に作者の落胆がしのばれる。そして、里居の記述は「見どころもなき古里の木立」を媒介に「ものむつかしう思ひみだれた心情を吐露していくこととなる。主家の雪景色を見損ねた落胆から続いて全く対比的な見所のない自分の屋敷の木立を見て憂愁に沈んでいく構図が見て取れる。ここにも自分の帰属する基盤を謙退する姿勢が見て取れるわけである。

作者はここで宮仕え以前と以後の境遇の変化について慨嘆する物語への距離感、古い友人の離反などが記され、宮仕えが作者に

ある種の犠牲を強いたことを思わせる。更に、作者は里において「あらぬ世に來たる心地」がまさると述べ、心の抛り所を喪失した自画像を描き、孤独な内面をかたどってみせる。このように見えてくると、里居の記述は反宮仕えの思いを吐露しているかに見えるが、そうではないだろう。ここでは宮仕えの代償として喪失したものに哀惜の念を隠さない作者の姿が描かれている。このことは、宮仕えという華麗な場に身を置きながらも、その世界に我を忘れず、自分が本来的に帰属している場を認識していることの表明とも捉えられよう。宮仕えに出るようになって、作者は「さも残ることなく知る身の憂さかな」と慨嘆するに至ったと述べるが、作者はここで榮華の世界とは別次元の憂いの中で生きるべき身の程であることの自己認識を示したのである。前節で確かめた賢明な女房を看取することができる。作者は先に見たように大納言の君と贈答を交わし、更に倫子の帰参を促す手紙に急かされて、宮仕えの場に立ち戻ることとなる。作者にとって、孤独を癒す場は宮仕えの場以外には無かったことが逆証明される。

二つの長大な憂愁の叙述を検証してみたが、こうした自己に沈潜する叙述は作者の謙退する姿勢を示すこととなり、またそのことは作者が見識ある女房であることを示し、こうした女房を抱えている主家を高めることにもつながるのであった。従って、憂いの叙述は主家慶祝の記をより高める方向で機能していると言えるのである。⁽¹⁴⁾

憂いの告白が荷なっている表現効果について、とりあえず代表

的な二箇所を確認したが、例えば寛弘五年十一月童女御覧の儀においても作者の思念は童女の華麗な舞をよそに、内向している。

そこでは将来、自分が確実に宮仕えに同化し、「ひたおもて」に平氣になるであろうという予見を述べ、自らの変貌を恐れている作者の危惧はその内実は不明だが、「あるまじきこと」をしでかすのではないか、という連想に発展し、これも極めて真摯な思いだが、宮仕えに同化することを恐れる自画像は、宮仕えに我を忘れていない女房が記されるという意味で、反宮仕えの方向に向かう叙述ではなく、主家慶祝の記と根源的に矛盾するものではなかった（十二月二十九日の夜の、宮仕えにたち馴れた自分を嘆く叙述についても同じことが言える）。

最後に『日記』冒頭部の、先に彰子中宮の造型を考える際に検討した記述について触れておきたい。

さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。（P141）

作者は陣痛の苦しみをさりげなく隠す中宮の姿を賛嘆し、日頃の憂悶の思い（「うつし心」）が忘れられていく恍惚を語りつつ、一方でそうした心の動きを「あやし」と問いただしている。宮仕えの場に己れを忘却しない作者の姿が刻印されているのであり、栄華の世界にありつつ奥床しい中宮の姿と、身の程をわきまえ苦悩を抱きつつ仕えていく女房の姿がこの序章部にすでに象徴的に描かれていたのであった。

四

第一節で確認したごとく、『日記』は女房日記、歌合日記に近似的な、すなわち主家慶祝の記としての性格を色濃く持っているのだが、『日記』に混在する憂愁の叙述はその一貫性に疑義を挟ませ、あるいはそこに主題を見出すような論を呼んだ。しかし、憂愁の叙述はすでに考察したように、主家慶祝の記をより奥行きのあるものにしているように思われる。従って、宮崎庄平氏は現行『日記』をすでに作者の記していた女房日記を元に書き改めたものと考えておられ、主家顯彰の叙述と憂愁の叙述混在の機制をそこに求めておられるが、論者は現行『日記』そのものが女房日記たりえていると考える。憂いに沈む叙述は自己の身の程を見つめることであったが、そこに称賛する対象に対して謙退する姿勢が看取され、身の程をわきまえること自体、節度を重んじる宮廷においては美德であった。自己の存在を対象化し、内省する姿勢がすぐれた女房の証であったと思われる。そこに独自の創意あふれる女房日記生成の機制があるのであり、憂愁の叙述が主家慶祝の記に組み込まれ得た意味が見出される。

注（一） 拙稿「紫式部日記」の憂愁叙述の意味と役割」（『古中文学論攷』

昭62・10）。本稿は、この前稿と取り扱う資料、論の方向性で共通するが、女房日記と『日記』の共通性や謙退する姿勢がその対象を際立たせる点の明確化など、より広い視点から踏み込んで論じようと企図したものである。なお、本稿引用以外の拙稿で本論と密接に関わるものに、「紫式部とむまの中將——反目の叙述に隠されてい

るもの——」(『中古文学』平1・5)『紫式部日記』十一日の暁の記の方法」(『中古文学論攷』平1・12)がある。

- (2) 拙稿『紫式部日記』消息体考」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』平1・1)

- (3) 石原昭平氏「日記文学の発生と暦——太后御記を中心として——」(『平安文学研究』昭38・12)。なお、平安時代の女房日記の在り方については宮崎莊平氏に一連の考察がある。

- (4) 中野幸一氏「紫式部日記」(『解釈と鑑賞』昭47・4)

- (5) 萩谷朴氏「紫式部日記全注釈」(昭46、48)

- (6) わずかに御冊子づくりに活躍する作者が中宮内裏遷路直前の記述に描かれるのみである。

- (7) 岡一男氏、神田秀夫氏などが説く。

- (8) 山本利達氏「『紫式部日記』試論」(『論集日本文学・日本語2中古』昭52)。作者の暗い心の動きは、讃美されるものに奥行きを与える働きをもつ、と説く。

- (9) 佐藤和喜氏「紫式部日記の表現」(『宇都宮大学教育学部紀要』平1・2)。苦悩を語ることが否定的なものでなく、主家を場の中における自己の位置から主体的に賞賛することで、そのすばらしさを一層強調することとなる、と説く。

- (10) 五十日の祝宴の記で若宮の行く末を寿いだ際、「千代もあくまじき御行末の、数ならぬ心地にだに、思ひつづけらる」と述べているのも、全く同じ関係が看取される。謙退する姿勢は『日記』の「はべり」の多用とも密接な関係を持つと思われ、この『日記』を読み解く鍵のように思われる。

- (11) 伊藤博氏「表現の論理」(『別冊国文学 王朝女流日記必携』昭61)

- (12) 拙稿『紫式部日記』における三人の女房の描かれ方についての一考察——宰相の君・大納言の君・小少将の君をめぐる記述を中心に——(『中古文学論攷』昭63・12)

- (13) 注(10)に「常に自分を意識していること、それこそが秩序を重んじる場に存在する人々のなすべき作法なのである」という有益な指摘があり、我が意を強くする。

- (14) 作者が憂愁の叙述の機能について自覚的かどうか、むしろ読み手の読みの問題ではないか、という見解が生じようが、作者は憂愁の告白が主家慶祝の記と矛盾しないという見通しは持っていたように思われる。

- (15) 宮崎莊平氏「紫式部日記の作品性格」(『日記文学 作品論の試み』昭54)